

【論文】

イディッシュ語で書かれたウクライナ文学 ——ドヴィド・ベルゲルソンとポグロム以後の経験——

田中壮泰

はじめに

ディアスポラの言語であるイディッシュ語で書かれた文学について語るとき、作家の国籍に拘泥する必要はないとしても、作家が生きた土地の言語や文化が作品に与えた影響を無視することはできない。例えば、ソル・リプチンがその著書『イディッシュ文学史』¹で行ったように、ロシア、東欧、北米、南米、南アフリカなど、地域ごとに作家や作品を分類し、それぞれの特徴を捉える作業は必要である。これは現代の英語文学を考えた場合にも同じことが言えるだろう。

ロシア帝国領ウクライナで生まれ、ソ連で死亡したイディッシュ語作家ドヴィド・ベルゲルソン דוד בערגלסאן (1884–1952) にとって、まずはロシアとウクライナが彼の帰属する土地であった。とはいえ、ここではウクライナかロシアかという作家の単一的な帰属の問題を議論するつもりはない。というのも、帝政末期のキエフで活動したベルゲルソンは、同時代のキエフ（キーウ）を生きたポーランド語作家ヤロスワフ・イヴァシユキェーヴィチ Jarosław Iwaszkiewicz (1894–1980) と同程度にキエフの作家であったと言えるし、内戦末期（1921年）にロシアを去り、ヒトラーが政権を握るまでの約10年間をベルリンで過ごした彼は、ロシア語作家ウラジーミル・ナボコフ Владимир Набоков (1899–1977) と同程度にベルリンの作家であったとも言えるからである。そして、どこにいても故郷のウクライナを描き続けた点で、ベルゲルソンはウクライナのイディッシュ語作家ショレム・アレイヘム שלום עליכם (1859–1916) 以降の系譜に位置する作家であったと同時に、より広く、比較文学的な視点から、ニコライ・ゴーゴリ Николай Гоголь (1809–1852) やレオポルト・フォン・ザッハー＝マゾツホ Leopold von Sacher-Masoch (1836–1895) まで含めた「多言語的なウクライナ文学」の枠組みで議論することも可能なのである。

ウクライナ文学を多言語的に捉え直す試みはウクライナでも近年、とりわけ「鉄のカーテン」消滅後に、国内外の研究者との共同作業を通じて広く議論されるようになって²。とりわけ本稿との関わりで重要なものに、北米のユダヤ人研究者とウクラ

¹ Sol Liptzin, *A History of Yiddish Literature*. New York: Jonathan David, 1972.

イナ国内外の研究者らによる共同研究論集『キエフのモダニズム：喜ばしい実験』³がある。これについては後に詳述するが、ロシア革命からロシア内戦に至る時代のキエフで、ウクライナ人の独立国家ウクライナ人民共和国が成立し、ウクライナ語と並んでロシア語、ポーランド語、イディッシュ語が公用語とされたこの国家のもと、短い期間ではあれ、多民族・多言語的な文化が展開した。これを「喜ばしい実験」として再評価したのが本書であり、ドヴィド・ベルゲルソンが新進気鋭のイディッシュ語作家として登場したのも、この同じキエフであった。

しかし、ベルゲルソンのキエフ時代については「ウクライナ文学」の枠組みで語ることができるとしても、ロシア内戦後にキエフを離れ、ベルリンに移住して以降のベルゲルソンについても同じように語ることはできるだろうか。

1933年にベルリンを離れ、その翌年にモスクワに移住し、1952年にスターリンによる粛清でこの世を去るまでのおよそ20年間、モスクワを拠点に創作活動を続けたベルゲルソンは、しばしばソ連のイディッシュ語作家として語られることがある⁴。ところが問題は、ベルリン移住後もベルゲルソンは故郷のウクライナを描き続けていたことである。その作品にはしばしばウクライナ人が登場し、作中にはウクライナ語のセリフが飛び交ったばかりか、ウクライナ人を主人公とする短編さえ書いているのである（これも後述する）。ベルゲルソンとウクライナとの結びつきに、もっと目を向けてゆく必要があるだろう⁵。

2 社会主義時代（党がウクライナ語を保護した20年代の「コレニザーツィア」（土着化）政策が終わり、「大飢饉」がウクライナを襲う30年代のスターリンによる独裁以降）ロシア化が強力に押し進められたウクライナでは、独立後にロシア語の影響を抑え、ウクライナ語の使用を義務化する運動が展開されるが、その背後にはディアスポラのウクライナ社会からの強い働きかけがあったことが知られている。Vic Satzewich, *The Ukrainian Diaspora*. London and New York: Routledge, 2002 のとりわけ1章と8章を参照せよ。すなわち、民主化以後のウクライナにおける文学の脱キャンノン化（脱ソ連化）の動きは、一方で、集団的なナショナリズムの発露であったと同時に、他方で、「世界文学」としてのウクライナ文学の捉え直しとしてもあったと言える。

3 I. R. Makaryk and V. Tkacz (eds.), *Modernism in Kyiv: Jubilant Experimentation*. Toronto Buffalo London: University of Toronto Press, 2015.

4 例えば、*Ashes Out Of Hope: Fiction by Soviet-Yiddish Writers*. ed. by Irving Howe and Eliezer Greenberg. New York: Schocken Books, 1977.

5 ベルゲルソンに限らず、ウクライナに生まれ、国外に移住後も非ウクライナ語でウクライナを描いた作家は少なくない。近年そのような作家でもウクライナ文学の範疇に含めようとする議論も出ている。例えば、レシヤ・イヴァシユクはクリミア自治共和国も含め、歴史的にウクライナと呼べる土地で書いた作家であれば、ロシア語作家（アンドレイ・クルコフなど）も、クリミア・タタール語作家（エミール・アミットなど）も、あるいは国外に移住した者でも、例えばオデッサ出身のドイツ語作家マリアナ・ガボネンコ Мар'яна

イディッシュ文学におけるウクライナのテーマを論じたものにイスラエル・バータルの論文「火山の頂上で：近代の東欧ユダヤ文学に描かれたユダヤ人とウクライナ人の共存関係」がある⁶。「イディッシュ語とウクライナ語が入り混じった会話が飛び交い」、ウクライナ人とユダヤ人が「互いに利益をもたらす経済的な共存関係」にあったという19世紀から、ウクライナでポグロム（ユダヤ人への襲撃）が広まり、互いの関係が崩壊していく20世紀初頭までの時代を記述したもので、メンデレ・モイヘル・スフォルム מענדעלע מוכר ספרים (1836–1917) やショレム・アレイヘムなど、近代イディッシュ語文学の草創期に活躍した作家たちが俎上に載せられているのだが、ここでも、「多言語的なウクライナ文学」（ここではユダヤ人とウクライナ人との共生）の歴史は、革命と内戦の時代（＝ポグロムの時代）で止まっているのである。

そこで本論は、まずはベルゲルソンの先達としてショレム・アレイヘムを取り上げ、その代表作の一つである『牛乳屋テヴィエ』 טביה דער מילכיקער (1917年刊) に描かれたウクライナ表象を考察する。その後、アレイヘムを始点とするイディッシュ語で書かれたウクライナ文学の系譜にベルゲルソンを位置づける。ベルリン時代のベルゲルソンの作品の中でウクライナ人を描いたものに二つの短編、「二匹のけだもの」 רוצחים צוויי (1926) と「逃亡者」 צווישן עמיגרענטן (1927) がある。ここではこれら二作品を考察し、それをアレイヘム以降の「イディッシュ語で書かれたウクライナ文学」として読み直したい。つまり、本論には二つのテーマがある。一つは、アレイヘムからベルゲルソンに至る「イディッシュ語で書かれたウクライナ文学」の系譜を浮かび上がらせること。もう一つは、アレイヘムとベルゲルソンとの間のウクライナ表象の差異を明らかにすることである。そして、これらの作業を通じて本論が目指すのは、今まさに様々な視点から、ウクライナをはじめ各国の研究者を交えた共同研究の形で模索されている、「多言語的なウクライナ文学」の新たな可能性を提示することである⁷。

Гапоненко / Marjana Gaponenko (1981–) のように、ウクライナ出身であれば、その作品をウクライナ文学として読むことができると主張している。Lesya Ivasyuk, "Galicia in Texts by Modern Ukrainian Authors: New Structures of "World Literature" Between Literature and Public History," *International Journal of Languages, Literature and Linguistics*, vol. 5, no. 1, 2019, pp. 37–46. 一見乱暴な主張に見えるが、単一国家・単一言語の枠組みを超えた文学の読み方がウクライナ文学をめぐって現在様々に模索されていることが分かる。

⁶ Israel Bartal, "On Top of a Volcano: Jewish-Ukrainian Co-Existence as Depicted in Modern East European Jewish Literature," in H. Aster and P. J. Potichnyj (eds.), *Ukrainian-Jewish Relations in Historical Perspective*. Edmonton: Canadian Institute of Ukrainian Studies Press, 1990, pp. 309–325.

⁷ 「多言語的なウクライナ文学」の記述の試みのなかで比較的新しいものとして、他に、イヴァン・フランコ (1856–1916) のウクライナ語小説『レルとポレル』 Лель і Полель (1888) をマゾフホのドイツ語小説『毛皮のヴィーナス』 *Venus im Pelz* (1870) と比較した Maxim

1

ホロコースト以前の東欧にはシュテットルと呼ばれるユダヤ人の集落が広く点在していた。住民の半数近く、多い場合は八割以上をユダヤ人が占めたシュテットルの生活は、町の異教徒とも周囲に広がる農村とも緩やかに結びつきながら、ユダヤとスラヴの世界が混合した独自の文化を形成した。

シュテットルを描いた作品として日本ではシャガールの絵と並んでミュージカル『屋根の上のヴァイオリン弾き』が有名だが、そのミュージカルの原作として知られるイディッシュ語作家ショレム・アレイヘムの小説『牛乳屋テヴィエ』が描いていたのも、20世紀初頭のウクライナのシュテットルにおけるユダヤ人と異教徒との多言語的な交流である。

シュテットルで酪農を営むユダヤ人テヴィエは、キエフと思しき架空の街イエフベツへ馬車を走らせ、街の裕福なユダヤ人や異教徒にチーズやバターを売り歩く生活を送っている。そのような生活を通じて、テヴィエはユダヤ人の言葉であるイディッシュ語とヘブライ語だけでなく、異教徒の言葉であるロシア語とウクライナ語も流暢に使いこなしている。例えば、地元のスラヴ人たちとの関係をテヴィエはこんな風にウクライナ語を織り混ぜて語っている。

「あたしたちはずっと異教徒、つまりはエサウに囲まれて暮らしてきました。みんな村の名士たちとも気心の知れあった関係にあったのです。親友関係というか、親分子分関係というか、それこそ「テヴェリのとつつあん」と言えば、一目置かれる存在だったんです！ どんなですって？ たとえば、助言が必要になればテヴェルの意見に従え、熱が出て薬が欲しくなるとテヴェルんとこへ行こう、借金が必要になれば、やっぱりテヴィエのところだ、ってことでして。」⁸

ところで、ウクライナにおけるユダヤ人の歴史は古く、遡れば、ポーランドガリト

Tarnawsky, “Galician Sex: Ivan Franko and Leopold von Sacher-Masoch” in A. Achilli, D. Yesypenko and S. Yekelchik (eds.), *Cossacks in Jamaica, Ukraine at the Antipodes: Essays in Honor of Marko Pavlyshyn*. Boston, Mass: Academic Studies Press, 2020, pp. 334–347. や、ウクライナ語作家ボリス・フリンチェンコ（1863–1910）をアレイヘムの同時代人として論じた Фелікс Левітас, Юрій Ковбасенко, Оксана Салата, Репрезентація українсько-єврейських відносин у творах Шолом-Алейхема та Б.Грінченка // *Український історичний журнал*. Київ. 2020. Вип. 4. С.77–84. などが挙げられる。

⁸ ショレム・アレイヘム（西成彦訳）『牛乳屋テヴィエ』岩波文庫、2012年、311頁。この小説は日本では長らく英語からの重訳で読まれてきたが、イディッシュ語の原典に基づいたこの新訳が出たことで、イディッシュ語にスラヴ諸語を織り交ぜたテヴィエの多言語的

アニア大公国を併合し、北はバルト海、南は黒海、東はドニエプル川まで支配圏を拡大した16世紀にウクライナへのユダヤ人の移住が進んだ。それ以降、ユダヤ人とウクライナ人は隣人同士として、しばしば衝突を繰り返しはしたが結びつきを深め、両者の関係は互いの言語にも変化を与え合った。スラヴ諸語を織り交ぜたテヴィエのイディッシュ語は、その一例である。訳者西成彦の「解説」⁹にあるように、シュテットルの生活が生んだユダヤ人の「雑種的な言語」を、それこそ明治期の日本文学が「言文一致体」を模索したのと同様に、そのまま描き出そうとした小説が『牛乳屋テヴィエ』であった。

しかし、この小説を語る上でもう一つ重要な点は、これがユダヤ人とウクライナ人の関係が崩壊していく時代に書かれていたということである。テヴィエが生きた帝政ロシアの末期は、ロシア各地で反ユダヤ主義が急激に高まる時代にあり、それがもつとも過激な形をとって噴出した都市の一つがキエフであった。

1881年3月に起きたアレクサンドル二世の暗殺事件を引き金に、ロシア全土に広がったポグロムの波はキエフにも及び、1905年の日露戦争後の混乱のさなかにもキエフでポグロムが勃発した。さらに1911年には、キエフで煉瓦工場の管理人として働くユダヤ人メンドル・ベイリス מענדל בייליס (1874-1934) がキリスト教徒の子どもに対する儀式殺人の疑い、いわゆる「血の中傷」を受けて投獄されるという事件が起きている。これはドレフュス事件の再来として国際的に非難の声が上がり、1913年の裁判でベイリスは無罪を勝ち取っている。しかしその翌年に、今度は第一次世界大戦が勃発し、再びウクライナの各地でポグロムが吹き荒れることになった。

なお、アレイヘムは1912年に『血の冗談』 דער בלוטיגער שפאס という一種の風刺小説を書いている。ユダヤ人の友人と身分を交換するという遊びに興じたことで、反ユダヤ主義の攻撃に晒され、儀式殺人の告発を受けるロシア人青年の運命を描いた作品である。また、ベイリス事件を題材にした小説としては、他にユダヤ系アメリカ人作家バーナード・マラムッド Bernard Malamud (1914-1986) の『修理屋』 *The Fixer* があるが、原作刊行の3年後の69年に日本語訳¹⁰が刊行されており、この小説を通じてベイリス事件を知った日本人は少なくないだろう。

実は『牛乳屋テヴィエ』にもベイリスの名は度々登場している。物語の後半でテヴィエはウクライナを去る決意を固めるのだが、その時、迫りくるポグロムの空気を象徴する存在として、テヴィエが度々口にするのがこの名前であった。要するに、『牛乳

な話芸を、ルビを多用した訳文を通じて、日本の読者は楽しむことができるようになった。

なお、エサウとは『旧約聖書』に登場するイサクの双子の息子の一人。その子孫はエドム人となり、家督を継いだ弟のヤコブが現代のユダヤ人の祖となる。

⁹ 同書、374頁。

¹⁰ バーナード・マラムッド (橋本福夫訳) 『修理屋』早川書房、1969年。

『屋テヴィエ』はユダヤ人とウクライナ人との友情というよりも、両者の関係が崩壊していく過渡期のウクライナを描いていたのである。

わずかだがこれまでに築いたものがあって、少しだが家畜を売った代金もある。さらに、少しではあっても家を売れば金になる。小銭ばかりでも、集めれば財布はふくれるだろう。不幸中の幸いってやつだ！ それに、そんなことは考えたくもないが、仮に一文無しだったとしても、メンドル・ベイリスを思えば、ずっとマシじゃないか！……¹¹

8つの連作短編からなる『牛乳屋テヴィエ』は1895年から1914年まで書き続けられ、物語も第一次世界大戦のさなかにテヴィエがウクライナを離れる直前で終わっているが、作者アレイヘムがキエフを離れるのはもっと早く、1905年になる。アレイヘムがキエフにいたのは1879年から1905年までの四半世紀に及び、その間、『牛乳屋テヴィエ』の初期の連作をはじめ数多くの作品を世に放つが、ウクライナでポグロムが広まる1905年に家族と共にキエフを離れ、その後、主にニューヨークとベルリンに活動の拠点を移し、1916年にニューヨークで息を引き取っている。

2

ここでアレイヘム以後のイディッシュ語文学に目を転じたい。アレイヘムの次の世代を担ったイディッシュ語作家の一人にドヴィド・ベルゲルソンがいる。アレイヘムと同様、キエフを活動の拠点として出発した作家である。1909年の小説『駅の周辺』*ארום וואַקוואַל* でデビューした彼は、ちょうどアレイヘムと入れ違いにキエフの文壇に登場したことになる。しかし、デビューからほどなくして第一次世界大戦が勃発。さらに1917年のロシア二月革命、十月革命勃発による混乱のなか、1918年3月には、ドイツ軍最後の攻勢によってキエフもドイツ軍の手に落ちた。その間、革命軍と反革命軍との戦闘は十月革命後から始まり、ウクライナでは1921年まで、赤軍と白軍、ウクライナ軍とポーランド軍による三つ巴、四つ巴の戦闘が展開して、全土が内戦状態と化した。この内戦のさなかに、かつてない規模のポグロムが、キエフをはじめとするウクライナの各地で勃発した。1919年から21年の間だけで少なくとも5万人ものユダヤ人が命を落としたとも言われ、それ以上の数のユダヤ人が家を追われ、ウクライナを後にした¹²。ベルゲルソンもこの時期にウクライナを去っている。

ところで、ガリツィアのポグロムに関しては、野村真理と赤尾光晴が詳細に分析し

¹¹ ショレム・アレイヘム、前掲書、325–326頁。

¹² John Klier, *YIVO Encyclopedia of Jews in Eastern Europe*, vol. 2. New Haven and London: Yale University Press, 2008, s.v. “Pogroms” pp. 1375–6.

ている¹³。二人の研究から見えてくるのは、ロシア軍からはオーストリアのスパイ、ポーランド人とウクライナ人からはロシアのスパイとみなされ、どちらの側からも虐殺の対象になったガリツィアのユダヤ人が置かれた孤立した状況である。

注意したいのは、これと同様の状況がキエフでも繰り返されたということである。すでに述べたように内戦時代のキエフでは赤軍、白軍、ドイツ軍、ポーランド軍、ウクライナ軍をはじめ諸勢力が攻防戦を展開し、支配者の交代が繰り返されたが、その度にユダヤ人をめぐって、ある時は敵対する民族の手先、またある時はコミュニストの手先であるとの噂が立ち、それがポグロムを正当化する口実にも使われた。少なくとも、ここではガリツィアと同様に、キエフでもユダヤ人が置かれた状況は極めて複雑な様相を呈していたということを述べておきたい。そして、まさにこうしたポグロムがウクライナ各地で広がっていた時代にベルゲルソンはキエフで生きた。

1920年にボルシェヴィキによってキエフが陥落すると、「文化同盟」（注24参照）を含むキエフのイディッシュ語団体はすべてソヴィエトの機関に統合されたため、ベルゲルソンをはじめとするキエフのイディッシュ語作家たちはモスクワへ移住するが、その翌年、より自由な活動の場を求めて彼らの多くはベルリンへの再移住を決意している。

この時期、ロシア・東欧からベルリンへの移住を選択した者は少なくなかった。その理由として第一に挙げられるのが地理的な近さである。ベルリンのロシア人の中には、ボルシェヴィキ政権が短命に終わることを見込んで、ロシアからさほど遠くないベルリンを一時的な居住地とした者が少なくなかったと言われている¹⁴。第二に、交通の便の良さがある。すでに、この半世紀ほど前からロシアとドイツを結ぶ鉄道（Preußische Ostbahn）が開通しており、東から西へ移動する者は、パスポートの問題さえなければ、容易にベルリンまで移動できた。しかも、ベルリンを越えて北上すれば港湾都市ハンブルクとブレーメンがある。そこからさらにアメリカ行きの客船に乗ることができたのである¹⁵。もう一つが経済的な理由である。終戦直後のドイツはハイパーインフレに見舞われたことで、外貨を手にした外国人には、ヨーロッパでもつ

¹³ 野村真理『隣人が敵国人になる日』人文書院、2013年の三章と赤尾光晴「S・アン＝スキーの『ガリツィアの破壊』と記憶のポリティクス（上）（下）」『思想』（1093-1094）、岩波書店、2015年。

¹⁴ 諫早勇一『ロシア人たちのベルリン』東洋書店、2014年、44頁。

¹⁵ 19世紀末のロシア領ヴォルギーニのシュテットルに暮らすユダヤ人一家がニューヨークに移住し、そこで生き別れになった家族と再会するという物語を描いたヨーゼフ・ロートの小説『ヨブ——ある平凡な男のロマン』*Hiob: Roman eines einfachen Mannes* (1930)でも、アメリカ移住を決意した主人公のメンデル・ジンゲルが家族を連れて向かった先が、アメリカ行きの船が出発するブレーメンであった。平田達治・佐藤康彦訳『ヨーゼフ・ロート小説集2』鳥影社、1999年、115-118頁。

とも生活費の安い国になっていた。こうした様々な理由からベルリンはロシアや東欧から人が集まり、街の至る所でロシア語（しばしばイディッシュ語訛りの）が響いていたと言われている¹⁶。

当時のベルリンについて書いたものにマイケル・ブレンナーと諫早勇一の著書がある¹⁷。いずれもワイマール時代のベルリンがドイツ語だけの世界ではなかった点に光を当てたものである。

ブレンナーによれば、ワイマール時代のベルリンにはガリツィア出身のドイツ語作家ヨーゼフ・ロート Joseph Roth (1892–1939) の他に、現在ではイスラエルの「国民詩人」とも称されているハイム・ナフマン・ピアリーク חיים נחמן ביאליק (1873–1934) や、のちにノーベル賞作家となるシュムエル・アグノン שמואל עגנון (1888–1970) などヘブライ語を使用する数多くの知識人が集結していたという。また、諫早によればベルリンはウラジーミル・ナボコフのような白系ロシア人だけでなく、マクシム・ゴーリキイ Максим Горький (1868–1936) やイリヤ・エレンブルグ Илья Эренбург (1891–1967) のような、「国外に残るか、祖国に戻るか最終的に決めかねている」ロシア人たちがしばらくの間旅装を解く場所としてもあった。

その他にも、小説家のデル・ニステル דער ניסטער (1884–1950) をはじめ、キエフでベルゲルソンと仕事をともにしたイディッシュ語作家たちもベルリンに数多く滞在し、戦前にはショレム・アレイヘムが一時期居住していたこともあった。現在のミッテ地区にあたる「倉庫地区」(Scheunenviertel) と呼ばれる地区は、東欧出身のユダヤ人たちがまとまって暮らす地区として知られた。

キエフ出身者がベルリンに集まったのには、まだ他に理由があり、1918年の4月から12月までキエフはドイツ軍の支配下に置かれたことから、戦後に撤退を開始し

¹⁶ 例えば、イリヤ・エレンブルグは回想録の中で当時のベルリンを次のように語っている。「あのころ、ベルリンに何人ロシア人がいたか知らないが、おそらくかなりの数だったように思われる——どこへ行っても、ロシア語が耳にはいつてきたから。ロシア料理の店が何十軒と店を開いていた [...] ちょっとした作品を上演する劇場もあった。日刊紙が三種、週刊誌が五種、出ていた。一年の間にロシア物の出版社が十七社もできた。フォンヴィーゲンやピリニャークの作品、料理書、宗教書、技術関係の参考書、回想録、風刺物、なんでも出していた。」イリヤ・エレンブルグ(木村浩訳)『わが回想〈第2巻〉——人間・歳月・生活』朝日新聞社、1968年、23頁。あるいは、イディッシュ語詩人ドヴィド・アインホルン(1886–1973)はベルリンからニューヨークのイディッシュ語紙『前進』に寄せた記事の中で、「ユダヤのイントネーションと身振りを交えたブロークンなロシア語がベルリンの至る所で聞こえた」と述べている。

דוד איינהארן, גבירים פון אויסלאַנד וועלכע לעבן א גוטן טאג אין בערלין, פאַרווערטס, 14 יאן. 1923, 4.

¹⁷ Michael Brenner, *The Renaissance of Jewish Culture in Weimar Germany*. New Haven, Conn.: Yale University Press, 1996. 邦訳はマイケル・ブレンナー(上田和夫訳)『ワイマール時代のユダヤ文化ルネサンス』教文館、2014年。諫早著については注13を参照。

たドイツ軍に同行してベルリンに移住した者も少なくなかったと言う¹⁸。ベルゲルソンがこの都市に移住した背景には、先に到着していたキエフ出身のユダヤ人からの誘いがあったことがわかっている¹⁹。

要するに、ワイマール時代のベルリンは、第一次世界大戦とロシア内戦の戦火を逃れたさまざまな人々の避難場所になっていたということである²⁰。

したがって、ベルゲルソンのようにウクライナのポグロムを生き延びたユダヤ人だけでなく、同じ時期にポグロムの加害者ともなったウクライナ人もベルリンに避難していたことは想像に難くない。とはいえ、どちらも国家を持たない少数民族であったため正確な数を知るのは難しく、ユダヤ人に関しては共同体に登録されたユダヤ教徒の数なら把握できるが、ロシア人と同じ正教徒が多いウクライナ人については、その数を把握するのはほとんど不可能である²¹。いずれにせよ、ベルリンではポグロムの被害者と加害者が隣り合わせに生活していたということは間違いない²²。

¹⁸ キエフからベルリンに最初の避難民が列車で到着するのは、ドイツ軍が東部戦線から撤退を開始した直後の1919年1月3日であった。Gennady Estraiikh, "The Yiddish Kultur-Lige," *Modernism in Kyiv: Jubilant Experimentation*. p. 208, 216.

¹⁹ 次を参照。Joseph Sherman, "David Bergelson (1884–1952): A Biography," in J. Sherman and G. Estraiikh (eds.), *David Bergelson: From Modernism to Social Realism*. London and New York: Routledge, 2007, p. 25. ただし、ベルゲルソンがロシア脱出を執行した時、独ソ間に国交がなく、ポーランド・ソビエト戦争(1919–1921)の影響で陸路が使えなかったため、リトアニアの駐モスクワ大使ユルギス・バルトルシャイティス Jurgis Baltrušaitis (1873–1944) が当時、芸術家の保護を目的に発行していたパスポート(シャガールもこれでパリに移住した)を取得し、まずは列車でカウナスへ、その後海路でダンツィヒ(現グダニスク)に渡り、そこからさらにベルリンに移動している。次を参照。

א. בן אֵדיר, ריבאק דער מענטש, אין יששכר בער ריבאק. זיין לעבן און שאפן, פאריז, 1937, ז. 78.

²⁰ ほとんどの亡命者や移民にとって、ベルリンは祖国に帰るまでの腰掛けに過ぎず、そのため、1922年4月のラパッコ条約で独ソ間の国交が結ばれ、その翌年にインフレが激化すると、ソ連に帰国する者、ナンセンパスポートかその他の身分証を携えてさらに西へ移動を開始する者が増加した。ベルゲルソンは最後までベルリンに踏みとどまったロシア・東欧出身のイディッシュ語作家であったが、それが可能だったのも、彼がナボコフと同様に売れっ子作家だったことが関係している。

²¹ なお、1925年にドイツで実施された国勢調査に基づけば、ベルリンに住むユダヤ人の数は172,672人、そのうち外国人のユダヤ人は43,838人(25.4%)となっている。Salomon Adler-Rudel, *Ostjuden in Deutschland 1880–1940*. Tübingen: J. C. B. Mohr, 1959, S. 165.

²² 例えば、キエフ時代のベルゲルソンの仲間と、ともにベルリンに移住した歴史家のエリア・チェリコヴェルは日記(1921年7月17日付)のなかでこう書いている。「わたしたちは国外のウクライナ人の活動に関するかなりの量の資料を手に入れることができた……。わたしたちはベルリンでも、ウクライナの政治に精通し、何人もの重要なポグロム活動家の消息にも通じている人々と出くわしてきた。」

というのも、ベルリン時代にベルゲルソンが小説のテーマの一つとして描いたのが、こうした一触即発の緊張状態の中でウクライナ人とユダヤ人のそれぞれが生きたポグロム以後の亡命生活であったからである。その一つに、1926年に発表された短編「二匹のけだもの」がある。

主人公のアントン・ザレンボは内戦時代にコサック軍の頭目^{アタマン}としてユダヤ人を虐殺した過去を持つウクライナ人である。故郷で「お尋ね者」になった彼はベルリンに逃げ、亡命ウクライナ人組織からの支援で細々と生きてきた。その彼が、戦争未亡人のドイツ人であるヒルデ・ギンターの家に間借りして三日目のこと。その家にはテルという名の飼い犬がいたが、その犬が犯した過去の殺人事件についてザレンボは家主から聞くことになる。家主の話によれば、テルを飼って三年ほど経ったある日、孤児院の赤ん坊を引き取ったところ、嫉妬に駆られたテルによって赤ん坊が咬み殺されたと言う。

この話を聞いた瞬間、ザレンボは、同郷のユダヤ人を虐殺した自らの過去に引き戻されてしまうのである。

アントン・ザレンボのあばた顔は悲しみと郷愁でいっぱいになった。寝室の床で首を咬み切られて死んでいたという血まみれの赤ん坊の話は、かつて彼が徒党を率いて略奪と虐殺をくり広げた、あのウクライナのユダヤ村で起きた似たような話を思い出させた。血を……ユダヤ人の家々で流れた血を思い出した。路上の血を思い出した。道にはガラスの破片が散らばり、さまざまな布切れが舞い、ユダヤ人の腸^{はらわた}や血まみれの死骸が転がっていた。何体かは首がちょん切られていた——白髪混じりの髭^{ひげ}をたくわえた生首もあった。²³

犬が赤ん坊を咬み殺したという事件は悲惨ではあるものの、それをポグロムと重ね合わせるザレンボの反応はどこか過剰である。一種の戦争神経症（Kriegsneurose）の発症をここに見ることもできそうである。しかし、ここで注意したいのは、ザレンボがポグロムの過去を思い出したのは、もっと他に原因があったということである。

家主の語りは、ザレンボのトラウマ的な記憶を刺激しただけではなかった。それは彼の中で「故郷の村へのノスタルジー」を掻き立てるものでもあった。というのも、彼女の「独特のドイツ語のお喋り」が、「かつて彼が仲間と一緒に略奪と虐殺の限りを尽くした、あのウクライナのシュテットルでよく耳にした」という、「ユダヤ人のお喋り」を彷彿させるものであったからである。ザレンボの故郷で話されていたイ

זושה שניקאווסקי, די געשיכטע פון דעם איצטיקן בוך, אין אליהו טשערקאווער, די אוקראינער פאָגראַמען אין יאר 1919, יוֹאָ, 1965, ז. 340.

²³ דוד בערגעלסאָן, צוויי רוצחים, פאָרווערטס. 14 אפריל 1926, ז. 7.

ディッシュ語のことである。つまり、ザレンボは家主の語りの内容ではなく、彼女の声の響きによって過去に引き戻され、ポグロムの体験を思い出すことになるのである。

実は、「二匹のけだもの」がニューヨークの『前進』紙に掲載された一ヶ月後、1926年5月25日に、奇しくもザレンボと同じ、ポグロムに関与したとされるウクライナ人のセメーン・ペトリューラ Семен Петлюра (1879–1926) が、パリで射殺される事件が起きている。

ペトリューラは1917年のロシア革命の直後にキエフに誕生したウクライナ人の独立国家、ウクライナ人民共和国(1917–21)で軍部のトップを務めた男である。同じ時期に同名の国家がボルシェヴィキによってハリコフ(ハルキウ)に建国されているが、キエフにできた方はボルシェヴィキと対立関係にあった。ウクライナ人による初の近代的な独立国家として誕生し、また、少数民族に広く自治を認めたことでも知られるこの国は、ポーランド問題省とロシア問題省と並んで、ユダヤ問題省(Міністерство Єврейських Справ)を設置し、イディッシュ語を公用語の一つとするなど、ユダヤ人とウクライナ人が共通の国家建設に向けて協働した歴史的に最初の試みとしてもあった²⁴。

ところが、1919年2月に赤軍によってキエフが攻め落とされると、ヴィンニーツァに逃れたペトリューラとその政府は、同年4月にポーランドと手を組み、1921年3月のリガ条約締結まで赤軍・白軍との間でキエフをめぐる争奪戦(ポーランド・ソビエト戦争)を展開することになる。このとき、ウクライナ軍によるポグロムが各地で勃発した。ペトリューラはこの時期のポグロムの主犯とされ、内戦終結後、パリに逃げていたところ、1926年5月、ロシア領イズマイル出身のユダヤ人ショレム・シュヴァルツバルド שלום שווארצבאָרד (1886–1936)によって射殺されているのである。

この事件の直後にシュヴァルツバルドは、ペトリューラの殺害を、虐殺されたユダヤ民族のための報復であると主張し、翌年10月にパリで開かれた裁判で無罪を勝ち取っている。この裁判は国際的に注目を集め、後に「ジェノサイド条約」の発案者となるユダヤ系ポーランド人の法学者ラファエル・レムキン Raphael/Rafał Lemkin (1900–1956)にも大きな影響を与えた出来事としても知られている²⁵。

²⁴ なお、このユダヤ問題省の下、ブンドや労働シオニズムなどの諸党派が連携しイディッシュ語による文化と教育の推進を目指す「文化同盟」(קולטור־ליגע)が組織されたが、ベルゲルソンはその中心メンバーであった。Henry Abramson, *A Prayer for the Government: Ukrainians and Jews in Revolutionary Times, 1917–1920*. Cambridge, MA: Harvard University Press, 1999, pp. 33–66.

²⁵ 自伝の中でシュヴァルツバルドについてレムキンはこう語っている。「シュヴァルツバルド裁判の後、私はある記事を書き、そのなかで彼の行動を「美しい犯罪」と呼んだ。そして、国家、人種、宗教的集団の破壊に関する道徳的基準を統一するための法律がないことを嘆いた。徐々に、行動しなければならぬという決意が私のなかで熟していった。」

「二匹のけだもの」の中でも、ザレンボと家主の間で、虐殺に対する裁判の有無が話題に上がっている。物語の終盤において、ポグロムをめぐる裁判が開かれたかどうかを尋ねる家主のギュンター夫人に向かって、ザレンボが「裁判なんて一度もなかった」と呟く場面である。

——それで裁判は？ ——彼女の一番の関心はそこだった——裁判は開かれたの？

——いいえ——とザレンボは首を振った——裁判なんて一度もなかった。

ギュンター夫人は悲しみと郷愁でいっばいの男のあばた面を見つめた。しばらく考え込んだあと、憐れみのこもった声でこう言った。

——可哀想に！ それじゃあ、ちょうど、うちの可哀想なテルとおんなじだね……。²⁶

ポグロムの虐殺者は、ここで赤子を咬み殺した犬と重ね合わされている（タイトルの「二匹のけだもの」とはこの二人のことである）。そして、自分が犯した罪に見合う裁きを受けずにいるザレンボたちの状態を「可哀想」なものだと言うことで、殺人者を責めるのではなく、殺人者を罰せずにいる社会に対して、疑問を投げかけているのである。

実際、当時は虐殺者を裁く法はどこにも存在しなかった。その結果、シュヴァルツバルドはみずから法の代行者としてペトリューラに死刑を下し、それがパリの裁判で正当化されるという事態が生じたわけである。

こうして見ると、「二匹のけだもの」は予言的な小説であったとも言えそうだが、そうではなく、当時はポグロムをめぐる責任問題が、ベルゲルソンの周囲でも、シュヴァルツバルドの周囲でもしばしば話題に上がっていたとは考えられないだろうか。例えば、ベルゲルソンとともにキエフからベルリンに移住したユダヤ人の一人に、エリア・チェリコヴェル *אליהו טשעריקאָווער* (1881–1943) がいる。1919年にキエフで「ウクライナのポグロムに関する資料収集と調査のための編集委員会」(רעדאָקציאָנס קאָלעגעיִע אויף זאַמלען און אויספאַרשן די מאַטעריאַלן וועגן די פּאָגראַמען אין אוקראַינע) を組織し、1921年のベルリン移住後に、「東方ユダヤ歴史アーカイヴ」(מזרח ייִדישער היסטאָרישער אַרכיוו) を設立するなど、ポグロムの記憶の保存をライフワークとした歴史家である。チェリ

Donna-Lee Frieze (ed), *Totally Unofficial: The Autobiography of Raphael Lemkin*. New Haven and London: Yale University Press, 2013, p. 21. また、以下も参照。フィリップ・サンズ (園部哲訳) 『ニュルンベルク合流——「ジェノサイド」と「人道に対する罪」の起源』白水社、2018年、228–243頁。

²⁶ בערגעלסטאָן, צוויי רויצחים, דצ"ו.

コヴェルは1926年にパリに移住し、シュヴァルツバルド裁判の弁護委員会に加わることになるが、ベルゲルソンはチェリコヴェルらと共にベルリンのどこかで、ポグロムに対する裁判の必要性を議論していた可能性がある²⁷。

いずれにせよ、「二匹のけだもの」の特筆すべき点は、そうした現実の事件とのつながりであるよりも、ウクライナの虐殺者の描き方にある。先にも述べたが、ベルゲルソンは故郷のシュテットルに対するウクライナ人のノスタルジーを描いていた。しかも、そのノスタルジーが生まれたのは、イディッシュ語を彷彿させるドイツ語を耳にしたからである。ザレンボは裁きを受けるべき存在であると同時に、同情すべき人物としても描かれており、ベルゲルソンの筆致は両義的である²⁸。例えば、ザレンボとシュテットルとの関係について、ベルゲルソンはこのように書いている。

彼の話によれば、ザレンボが生まれ育った村の一角はウクライナ人だけの土地だった。ところがそこにユダヤ人の町が建設され、やがてそこはユダヤ人の土地になった。ザレンボの村ではそれを目障りに思う者はいなかった。それどころか誰もがシュテットルを喜んだが、ザレンボの内部で最初は小さな火種だったものが恐ろしい炎に膨らんでいった。²⁹

ベルリン時代のベルゲルソンの仕事は、イディッシュ語で描くことができる世界を

²⁷ ベルゲルソンとチェリコヴェルは「キエフ・グループ」の一員として一括りに語られることが多い。しかし両者の影響関係を掘り下げた研究はまだなく、今後の課題としてある。また、シュヴァルツバルドとチェリコヴェルの関係については、Kelly Johnson, “Schwarzbard: Biography of a Jewish Assassin,” PhD diss., Harvard University, 2012, p. 135 ならびに pp. 180–181 を参照せよ。パリからロシア内戦に参加したシュヴァルツバルドは、パリに帰還後、回想録の刊行を準備していたが、その出版先として1923年頃にパリの知り合いから、当時ベルリンでポグロム関連の叢書を刊行していたチェリコヴェルを紹介されている。

²⁸ この点でベルゲルソンは、彼の少し上の世代にあたるウクライナ出身のイディッシュ語作家ラメド・シャピーロ לֵאמֶד שַׁפִּירָא (1878–1948) と異なる。実はシャピーロもウクライナ人を主人公にしたイディッシュ語小説を書いている。「白いハラール」 ווייסע חלה (1919) の主人公ヴァーシャは子どもの頃から近隣の町に住むユダヤ人の存在に強い興味を示していた。一度だけハラール(ユダヤ教徒が安息日や祭日に食するパン)を盗んで食べたことがあったが、それ以来彼はその不思議なパンの虜になってしまう。そんななか第一次世界大戦が勃発し、ヴァーシャは兵士になり、やがてユダヤ人の虐殺に加担することになる。ユダヤ人の家に押し入った彼は、その家の女を絞め殺し、その肉体を「白いハラール」に重ね合わせて、むさぼり食うというものである。ポグロムの記憶を主題にするとき、暴力をどこまで描くのが問題になる。ベルゲルソンもシャピーロも主題の選択においては近いが、その処理の仕方が異なった。いずれ二人を比較して論じてみたい。

²⁹ בערגעלסאָן, צוויי רוצחים, דצ"ו.

ぎりぎりまで拡張する試みであったとも言える。そもそも彼が執筆言語としたイディッシュ語は、ウクライナのシュテットルでの長年にわたるユダヤ人と異教徒との隣接関係が生み出した「雑種的な言語」であったはずである。ユダヤ人にとってのウクライナ語がそうであったように、ウクライナ人にしてもイディッシュ語が彼らの母語の一つであった可能性はゼロではなかったと考える必要もあるだろう。

3

ここでもう一つの作品「逃亡者」についても紹介したい³⁰。「二匹のけだもの」の翌年、つまり、シュヴァルツバルドによるペトリューラ暗殺事件の一年後に発表された小説で、これもポグロムの記憶がテーマになっている³¹。

物語は、ベルリンに暮らす作家の「わたし」の家に「ユダヤ人テロリスト」を名乗る若者が突然現れるところから始まる。

ロシア領ヴォルギーニ地方（現在のウクライナ北西部）の出身だという若者は、内戦時代のポグロムによって故郷を失い、「肉体労働者として」パレスチナに逃げ、それからベルリンに到着し、現在は「ひもじい思いをしながらも物書きで暮らして」いるという。そんなある日、若者が居住するベルリンの下宿に、故郷を襲ったポグロムの首謀者と思しきウクライナ人が入居してくるのである。それからというもの、若者は、下宿のウクライナ人を密かに見張りながら殺害計画を温めてきたといい、「わたし」に向かって、もし計画に協力する気があれば、リボルバーを届けてくれ、と言いついて立ち去るが、その数日後、若者の自殺をほのめかす「走り書き」が郵便で「わたし」に届けられ、物語は幕を閉じるのである。

要するに、ウクライナ人の「ポグロムシュテツク虐殺者」を目にしたことから若者がとってきたこれまでの行動がここに語られているわけだが、「ぼくが何者なのかを、あなたに知ってもらいたかったからです」と「わたし」に述べる若者にとって、未遂に終わった殺害計画は初めからさほど重要ではなかったとも言える。「いまになって思い知らされました。ぼくは故郷を棄てた逃亡者だということを……」という「走り書き」の文面には、彼が陥っていたと思しきアイデンティティの危機が読み取れるからである。そもそも彼が語り手「わたし」の前に登場する物語の冒頭から、若者の内面の分裂した状況が作品には描かれていた。

³⁰ この作品は西成彦編訳『世界イディッシュ短篇選』岩波文庫、2018年、109-146頁に収められている。以下、本書からの引用は本文中に括弧内で頁数のみ記した。

³¹ この小説の執筆年を1923年とする説もあるが、少なくとも現在確認できるこの小説の一番古いバージョンは、1927年に刊行された短篇集『嵐の日々』(שטרעמטע)に収録されたものである。次を参照せよ。Harriet Murav, *David Bergelson's Strange New World: Untimeliness and Futurity*. Bloomington: Indiana University Press 2019, p. 204.

右の頬はまっすぐでなんの変哲もない頬だったが、人生を謳歌しがっている様子で、こんな風に語りかけてきた。「みんなと一緒にいたい」。ところが、左の頬はよじれていて、彼ののものであって、そうでないみたいだった。まるで世界と戦争状態にあり、人生に見放されてしまった挙句、ますます人生が嫌になった、そんな頬だった。(113)³²

ペトリューラの事件と比較した時、「逃亡者」の最大の特徴は、殺害が未遂で終わっている点である。ポグロムの被害者と加害者との関係を報復の形で終わらせていないということだが、それだけでなく、そこには両者の奇妙な結びつきすら描き込まれている。例えば、ウクライナ人を目にしたとき、若者は「自分の片割れがやってきた」と口にしているのである。

頭が真っ白になりました。なんだかぼんやりして、急に気が軽くなったんです。ひとりぼっちじゃなくなったというか。自分の片割れがやってきたような感じア・シュテイクです。(184、ルビは筆者)

ポグロムの生き残りがその加害者とも言える人物を「自分の片割れ」(קטל א)と呼ぶこの事態をどう考えるべきだろうか。

この問いを考える上で、まずは若者の言語に目を向けてみたい。というのも、「逃亡者」はウクライナ出身のユダヤ人のバイリンガリズムの諸相を描いた小説としても読めるからである。例えば、若者の同郷者の一人にベレレ・ブムがいるが、言語に堪

³² ベルゲルソン研究者サシャ・センドロヴィチは、若者の歪んだ顔に同化と未同化との間で分裂していた当時のユダヤ社会を読み取っている。Sasha Senderovich, "In Search of Readership: Bergelson among the Refugees," in *David Bergelson: From Modernism to Social Realism*, p. 162. 同様の議論は Allison Schachter, *Disaporic Modernisms: Hebrew and Yiddish Literature in the Twentieth Century*. New York: Oxford University Press, 2012, pp. 84–120 にも見られる。実際、ヨーロッパの東西で異なる発展を遂げたユダヤ人が邂逅する契機ともなった第一次世界大戦後のドイツ社会で、東方ユダヤ人の容貌は、失われたユダヤの伝統を体現するものともされた(そのような言説の典型として、例えば1919年にアルノルト・ツヴァイクが著した「東方ユダヤ人の相貌」*Das ostjüdische Antlitz*がある)。西でも東でも「二種類の頬」に引き裂かれたユダヤ人は少なくなかったということである。しかし、「真鍮ボタンの制服を着てギムナジウムに通う学生」であった「逃亡者」の若者を「未同化」と言えるかどうかは疑問が残る。しかも、シュテットルでのユダヤ人の暮らしを考えると、ユダヤ社会だけでなく、その外部との関係にも目を向ける必要があるだろう。その関係が破綻した結果生じたのがポグロムであったからである。ベルゲルソンを「ウクライナ文学」として読むとは、そうしたユダヤ的な枠組みの外から読むということも意味している。

能で、ロシアにいた頃はロシア語のシオニズムの新聞に書き、ベルリンにやってくるからはドイツ語新聞に書かせてもらっているという彼は、自らの言語運用能力を十二分に発揮して世の中を渡り歩いたウクライナ出身のユダヤ人の一人である。他方で、主人公の若者もバイリンガルかポリグロットであったと考えられるが、彼はベレレ・ブムとは異なるタイプに属していた。

「逃亡者」は若者の語りを聞き手の「わたし」がイディッシュ語で記述した一種の「聞き書き」小説であるが、二人が実際にどのような言語で語り合っていたのかは分からない。一つだけはっきりしているのは、若者の故郷の言語であるロシア語とウクライナ語がそこに混在していたことである。例えば、ウクライナ人が下宿に登場する場面はこのように語られている。

ある早朝に、下宿の廊下で騒がしい物音がしたんです——甲高い声のウクライナ語も混じっていました。廊下を覗いてみると、重そうなスーツケースをふたつも抱えた宿のお手伝いさんが目に入りましたが、そのうしろに、口髭をぴんと反らせたあいつがいたんです。やたらぺこぺこする若者をひとり従えていました。／——^アで、^ドう^ンだ——^ク周囲をくくん嗅ぎながら、あいつは若者に訊きました——^アここには……^トユ^トダ^トヤ^ト人^トは^フい^ニない^トだ^ラう^ネね。(123-124)

ここでは、ウクライナ人の登場がウクライナ語の侵入として語られていることが分かる。そして、それはユダヤ人に対する悪意が露骨に込められた台詞であった。しかし、それを若者は「わたし」に向けて執拗に再現してみせているのである。

あるとき、廊下に出てみたら、そこにあいつがいて、電話口で話をしているんです。気に食わない知らせだったようです。耳に受話器を押しあて、大きく開いた両目には残忍な毒の炎がいつも以上に燃え上がっていました。「なんだって？」と相手を詰問していました。長く間延びしておびえた「なんだってえ？」です。(125-126)

ウクライナ人の登場は若者にとって故郷との再会でもあったわけだが、問題は、そうした「自分の片割れ」とも言える存在が、ポグロムの時代を境に、彼の敵になったということである。「あいつのせいでたくさんの虐殺が引き起こされたし、そのひとつでばくも祖父を殺された」と言う彼は、ウクライナ人を復讐すべき相手として捉えている。ところが、その直後に、「[祖父に対する]哀れみすら本当はばくでない他人の感情だったのかもしれない」と自信を喪失している彼は、ウクライナ人に対して複雑な葛藤を抱えていたことがわかる。

『言語間の接触』(1953年刊)の著者ウリエル・ヴァインライヒは、二言語併用が「有害」とまではいかなくとも、必ずしも「有益」とは言えない事例の一つとして、「第二言語が敵性国家のものである場合」を挙げている³³。「戦争は、往々にして二言語併用者をことさらにひどく苦しめる。それは彼にとって内戦(a civil war)と言ってもいいものだからだ」³⁴という言語学者パウル・クリストフェルセンの言葉は、「逃亡者」の若者の状況にそのまま当てはまると言えるだろう。例えば、ウクライナ人と出会った翌日の興奮を彼はこんな風にも語っていた。

「ピチュピチュ」と、近くの梢から鳥の囀りが部屋まで聞こえてきました。すると、その囀りが、どんな囀りよりも人生を感じさせてくれるような気がしたんです [...] 遠くに旅立とうとしているのに、この「ピチュピチュ」となかなか別れられないでいる、そんな気持ちになったんです。／下宿であいつを見張るようになったのはこの頃からです。(128-129)

ウクライナ語が「鳥の囀り」として語られているわけだが、要するに、故郷を破壊した敵であるはずのウクライナ人とベルリンで再会したとき、相手に憎しみを抱くよりも前に、その言語に対する愛着を感じていたのである。

二言語併用は、ベレレ・ブムのように、一方から他方の社会への自由な移動を可能にもすれば、「二種類の類」の若者のように、一方でも他方でもない分断した状態に陥れもする。「逃亡者」が描いていたのは、そのような自己の分裂に直面した一人の二言語併用者の「内戦」であったと言えるだろう。

まとめ

1884年にウマニに程近いシュテットル(現在のウクライナのサルヌィ Сарни)に生まれ、キエフでイディッシュ語による文学活動を開始したベルゲルソンは、ヨーロッパの自然主義の影響から出発し、ベルリン移住後に表現主義の手法を取り入れ、イディッシュ語文学に新たな境地を切り開いたことで知られる作家である。しかし、ヒトラーが政権を握った直後に妻子とともにベルリンを立ち、コペンハーゲンを経由して1934年にソ連に帰国している。その後、ビロビジャンのユダヤ自治州の建設運動や「ユダヤ人反ファシスト委員会」(1941年設立)に関わるなど、ソ連を代表するイディッシュ語作家として活躍したが、1952年にスターリンに処刑された。こうした

³³ Uriel Weinreich, *Languages in Contact: Findings and Problems*. The Hague: Mouton, 1966, p. 121.

邦訳は神島武彦訳『言語間の接触: その事態と問題点』岩波書店、1976年、241頁を参照。

³⁴ Paul Christophersen, *Bilingualism*. London: Methuen, 1948, pp. 9-10. 同じ文章は Weinreich, *ibid.*, p.121 にも引用されている。

後半生の活動によって、ベルゲルソンは現在ではしばしばソ連の作家として位置づけられることがある。

しかし、十年以上もの長きにわたるベルリンでの滞在期間（1921–33）は、彼の作家人生において、もっとも生産的な時期にあたり³⁵、このことからベルゲルソンは単純にソ連の作家と言い切ってしまうことのできない、様々な顔を持つことがわかるだろう。近年、ベルリン時代のベルゲルソンの活動にも注目が集まっており、ようやくソ連以前の活動も含めた彼の全体像を捉え直す時期に来ていると言える³⁶。

そこで本稿はベルリン時代のベルゲルソンに焦点を当て、ベルリンで書かれた彼の小説をアレイヘム以後の「イディッシュ語で書かれたウクライナ文学」の系譜に位置づけて読み直したが、これは民主化以降にウクライナで進められてきた新たな文学史の捉え直しの動きとも、どこかで結びつくのではないかと考えている。

「ウクライナ文学」の枠組みで捉えた場合、ショレム・アレイヘムはシュテットルにおけるユダヤ人とウクライナ人の関係が崩壊していく過渡期を生き、両者の友情を描くことができた最初で最後の世代のイディッシュ語作家であった。他方のベルゲルソンは両者の関係が崩壊した後の時代を生きたイディッシュ語作家であった³⁷。

ベルゲルソンはポグロム以後に亡命生活を送るユダヤ人とウクライナ人の経験を、それぞれの立場からイディッシュ語で書こうとした。彼の作品の中ではユダヤ人だけでなく、ウクライナ人もポグロムの時期に心に傷を負った存在として登場している。どちらもポグロムによって破壊された故郷に対する喪失感を抱えている点では同じである。そして、その破壊されたかつての故郷ではユダヤ人とウクライナ人は互いに隣人関係として共存していたのである。

³⁵ ベルリン時代の大きな仕事としては、全六巻の著作集（1922–23年）、モダニズム芸術誌『ザクロ』（מילגריום）の編集（1922年の創刊号のみ）、ロシア内戦を描いた長編『判決』（הדין מידת）（1929年）がある。

³⁶ 例えば次のアンソロジーが英語で出ている。Joachim Neugroschel (trans.), *Shadows of Berlin. The Berlin stories of Dovid Bergelson*. San Francisco: City Lights Books, 2005. また、ベルリン時代のベルゲルソンの作品を総体的に論じた最初の研究として、Delphine Bechtel, “Dovid Bergelsons Berliner Erzählungen. Ein vergessenes Kapitel der jiddischen Literatur,” *Jiddische Philologie. Festschrift für Erika Timm*, Hrsg. von Walter Röhl und Simon Neuberger. Tübingen: Max Niemer Verlag, 1990, S. 257–272. がある。

³⁷ したがってポグロムの描き方も両者では大きく異なる。『牛乳屋テヴィエ』の最終章「ヴァフラフラケス」には、「ユダヤ人の一味を撃て」との「上層部」の命令を受けた村人がテヴィエの家に押し寄せる場面が描かれるが、村人たちはテヴィエを傷つけることができず、窓ガラスを二、三枚割るだけで事足りるとし、終いには全員でテヴィエの「健康を祝して乾杯」するのである。アレイヘムとベルゲルソンのポグロムの描写の違いは二人が生きた時代以外にも、モダニズムの影響の有無など様々な要因を考慮することができるが、その厳密な比較は本論の目指すところではない。いずれ稿を改めて論じたい。

アレイヘムもベルゲルソンも自らの執筆言語であるイディッシュ語がユダヤ人とウクライナ人との長い共生の歴史が生んだ「雑種的な言語」であることを、かなり自覚していたはずである。その作品には驚くほど頻繁にウクライナ語が登場するからである。その意味においてベルゲルソンはアレイヘムに連なる「イディッシュ語で書いたウクライナ文学」の作家の一人として位置づけることができると考えている。

ポグロムの記憶はユダヤ人とウクライナ人とのあいだで現在でも、しこりとして残っている。1926年のシュヴァルツバルドによるペトリューラの殺害事件は、ポグロムの記憶をめぐってユダヤ人とウクライナ人の両者が肩を並べ、とことん議論する好機としてもあったと言える。ヘンリー・アブラムソンやケリー・ジョンソンのように、これを両者の和解に向けたプロセスの始まりと位置づける研究者もいる³⁸。しかし、この事件は両者の関係を余計に拗らせる方向にも進んだ。事件後にウクライナ人のあいだでペトリューラを民族の殉教者とする言説が生まれ³⁹、ペトリューラの殺害者を無罪としたパリの裁判に不満を抱いたウクライナ人のなかから、あらたなポグロムに走る者も出ている。例えば1941年7月25日にナチス占領下のルヴフ(リヴィウ)で、ペトリューラの死後15年を口実としてポグロムが勃発している⁴⁰。また現在でも、ペトリューラにどこまでポグロムの責任が問えるのかという問題や、シュヴァルツバルドはソ連のエージェントか、そうでないかという問題をめぐって、ユダヤ人とウクライナ人の研究者の間で論争が繰り広げられている⁴¹。

こうした現在まで続く状況を見ても、「イディッシュ語で書かれたウクライナ文学」としてベルゲルソンの文学を読み直すことには意義があると言えるだろう。本論はその一つの試みとして書かれている。

³⁸ Henry Abramson, *op. cit.*, pp. 263-278. Kelly Johnson, *op. cit.*, pp. 1-21.

³⁹ 例えば、パリのウクライナ誌『トリズブ』Тризубは、ペトリューラの死後10日ほど経った1926年6月6日号の巻頭でペトリューラの死をこう伝えている。「民族の指導者であり英雄であり殉教者の早すぎる悲劇的な死」(передчасну й трагічну смерть національного вождя, героя і мученика)。Тризуб (Париж). 1926. Ч. 34. С. 16. この雑誌は、1925年にペトリューラによってパリで創刊され、亡命ウクライナ人民共和国政府の非公式な報道機関として機能し、ドイツがフランスを占領する1940年5月まで存続した。

⁴⁰ ただし、ルヴフを中心とする東ガリツィアのウクライナ民族主義(1918年11月に西ウクライナ人民共和国を建国)とペトリューラとの複雑な関係を考慮すれば、これをウクライナ人の自発的な行動と断定することはできない。野村真理『ガリツィアのユダヤ人』人文書院、2008年、186頁および251-252頁の注(6)を参照せよ。

⁴¹ ウクライナ人歴史家タラス・フンチャクとユダヤ人歴史家ゾジャ・シャイコフスキとの論争はとくに有名である。以下を参照。Taras Hunczak, "A Reappraisal of Symon Petliura and Ukrainian Jewish Relations, 1917-1921," *Jewish Social Studies*. 1969, pp. 163-183. ならびに Zosa Szajkowski, "A Reappraisal of Symon Petliura and Ukrainian Jewish Relations, 1917-1921: A Rebuttal," *Jewish Social Studies* 32. 1970, pp. 184-213.

Ukrainian literature written in Yiddish: Dovid Bergelson and post-pogrom problems

Moriyasu Tanaka

Since Ukraine's democratization, various attempts have been made to reconsider Ukrainian literature from new perspectives to liberate it from its status of subordination to Russian literature. One such efforts can be found in an attempt to construct multilingual Ukrainian literature. In light of the recent research on Ukrainian literature, this paper reexamines Dovid Bergelson as an author of Ukrainian literature written in Yiddish, despite he is generally referred to as a Soviet-Yiddish writer.

Bergelson was born in Ukraine under the Russian Empire. He began his career as a Yiddish writer in Kiev and moved to Berlin after the Russian Civil War. He spent more than a decade in Berlin, from 1921 to 1933. During this time, he wrote several novels set in Berlin, including two short stories "Two Murders" and "Among Refugees," both of which dealt with the traumatic memories of pogroms. This paper places these two works in the genealogy of post-Sholem Aleichem's Ukrainian literature written in Yiddish, and reexamines them as the works that have sought to reconstruct a relationship between Jews and Ukrainians after the pogroms.

Aleichem was in the last generation of Yiddish writers who were able to portray the shtetl as a symbiotic space between Jews and Ukrainians. His masterpiece, *Tevye the Milkman*, depicts the transitional period of the shtetl's collapse in a mongrel language, a mixture of Ukrainian and Yiddish. On the other hand, Bergelson could not portray the Jewish-Ukrainian relationship in the post-pogrom period as friends as Aleichem did, and refused to portray it as enemies. Both "Two Murders" and "Among Refugees" can be read as novels that depict the swaying relationship between friendship and enemy.

Bergelson's literature can be contextualized in the present scenario, where both Jews and Ukrainians are in the process of reconciliation, struggling to overcome the post-pogrom confrontational relationship.